

〔論文〕

言葉の多義性と助数詞の選択に関する一考察

— 「電話」を例に —

濱野 寛子

名古屋学院大学経済学部

要 旨

従来、主要な助数詞の意味や用法については大部分が分析・記述されてきたが、助数詞の意味的制約の一般化を重視するあまり、個別事例における助数詞の使い分けについては考察が十分でなく、助数詞の使用の実態を表しきれていない。本稿では、ケーススタディとして「電話」を数える助数詞「台」、「本」及び「件」の使い分けについて分析を行った。分析のアプローチとして、「電話」の名詞としての多義的性質に注目し、名詞「電話」が、話者の主体的な事物の捉え方の反映として多義的に様々な意味的側面を有し、それらが助数詞の使用に影響を与えていると考えた。そして、認知言語学の理論的枠組みから、メトニミーの議論を用いて「電話」の有する多義的側面における各助数詞の使用の動機付けを分析し、焦点化される「電話」の意味的側面に応じて、各助数詞の使用が異なる動機付けにもとづいていることを示した。

キーワード：助数詞、名詞の多義性、捉え方、メトニミー、カテゴリー化

A Cognitive Linguistic Approach to Polysemy and the Choice of Japanese Numeral Classifiers; A Case of “Telephone”

Hiroko HAMANO

Faculty of Economics
Nagoya Gakuin University

発行日 2017年3月31日

1. はじめに

本稿の目的は、「電話」を数える際に用いられる助数詞「台」、「本」及び「件」の使い分けを、名詞「電話」の多義的側面に注目して認知言語学の理論的枠組みから記述することである。助数詞の使用における特徴として、1つの数える事物に対して複数の助数詞が用いられるという点がある。「電話」を数える場合は、「台」、「本」、「件」が用いられる。こうした1つの事物に複数の助数詞が使用可能であるとき、各々の助数詞で数える“直接の対象”が異なると指摘される。電話については、従来、「台」は“電話機”を数え、「本」は、電話での“交信数”を数えるとされ、「件」は、問い合わせや注文といった電話の場合に用いられるとされる (cf. 飯田2004)。しかしながら、(1a)のように、電話機が直接の対象であると考えられるような文脈で、「台」ではなく「本」が用いられている事例がみられる。また、同事例は相談の電話にもかかわらず、(1b)のように「件」が使用できない。こうした現象について、従来の分析では説明ができない。

- (1) a. 11日、スタート時間の10時に準備した4本の電話が一斉に鳴り、相談が始まった。
 「全国労働組合総連合」〈http://www.zenroren.gr.jp/news/2010/news101115_01.html〉
 b. *11日、スタート時間の10時に準備した4件の電話が一斉に鳴り、相談が始まった。

このように、助数詞の記述的問題点として、名詞の多義的性質により数える直接の対象が明示的に言語化されないということが指摘でき、従来の分析では、こうした点についてあまり考慮されていないといえる。本稿では、数える事物を表す名詞の多義的側面と選択される助数詞の関係に注目し、助数詞の意味や用法を再分析する。分析のアプローチとして、助数詞の使用を数える話者の主体的な使用の問題として位置づける。そして、認知言語学的動機付けの観点から、メトニミーの概念を用いて分析を試みる。

2. 先行研究

本節では、助数詞「台」、「本」、「件」の「電話」を数える際の意味や用法に関する先行研究として、飯田(1999, 2004)の記述的分析と、Lakoff(1980)及びMatsumoto(1993)の認知言語学的アプローチによる理論的分析を取り上げて概観し、従来の分析の問題点を指摘した後、本研究の分析のアプローチを示す。

2.1 記述的分析—飯田(1999, 2004)

飯田(1999, 2004)は、日本語の主要助数詞の意味と用法を、実例をベースに網羅的かつ辞書的に記述したものである。

まず、「電話」を「台」で数える場合について、飯田(2004:205)では、携帯電話や公衆電話を含めた電話機はすべて「台」で数えるとしている。「台」の意味全般については、以下の4

つの意味項目に分類しており、電話は、FAX、携帯電話等の通信機器であることから (cf. 飯田1999)、③の機械類に属することになる。

(2) 飯田 (2004 362) による「台」の意味分類

- ① 物や人を載せるもの、載せたもの (例：テーブル、書類棚)
- ② 乗り物 (例：荷台、自動車)
- ③ 機械類・機器類。家庭や個人で扱うことができる機械類(家電、通信機器・精密機器など)
- ④ 印刷や製本で16ページ分・32ページ分

次に、「電話」を「本」で数える場合は、「交信数」を数えているとしている (飯田2004)。「本」で数える典型的な対象について、従来の分析では i) 細長い形状の特徴を持った ii) 無生物であるとされ、「鉛筆」や「木」といった具体物があげられているが、「本」で数える対象で特徴的なのが、「ホームラン」や「電車」、「映画」のような抽象的な事物である (cf. 飯田2004；西光2004；三保2006；Lakoff 1987；Matsumoto 1993)。飯田 (1999) は、「電話」を数える「本」は、抽象的な用法と位置づけている。さらに、飯田 (1999, 2000) は、「電話」に「本」が用いられる条件として、電話をかける動作が“完結”していることを指摘している。“完結”については、電話をする側が電話をかけ、電話の相手が出て話をした時点で完結とされる。よって、電話をかけるだけの行為、かけても用件が伝わらない場合、相手が電話に出ない場合は完結とは言えず、「回」で数えるという (飯田2004:387)¹⁾。なお、この条件に関して、飯田 (1999, 2000) は、「本」には、さらに目的を持った行為の達成を数えるという用法があると指摘している。電話の場合は、電話をかけ、相手と話をする行為で、それが達成されたときに「本」が用いられるとされる。その他、例えば、野球のホームランやヒットといった打球も「本」で数えるが、野球では試合で得点することが目的であり、ホームランやヒットを打つことはその目的を達成するものといえるため、「本」が用いられると述べている²⁾。

助数詞「件」については、「件」で数える対象は、事例、物件、検査、事件、問い合わせや相談、そして芸術作品や固有名詞に至るまで多岐にわたっていることから、「件」は事象全般を数える抽象度の高い助数詞であると指摘している (飯田1999:213)³⁾。ただし、「電話」に「件」が用いられる場合については、「電話による相談やリクエストなどの数」を数えると指摘しているのみで、

- 1) 「回」と「本」との違いについては、「回」は相手に用件が伝わっても伝わらなくても用いるが、「本」は電話が「つながらない」場合にはふつう用いない、と指摘している (飯田2004：206)。例「3 {〇回 | ×本} 電話したが誰もでなかった」 (飯田2004：206)
- 2) 「目的を持った行為」とは「(発話者にとって) 有用な項目」とあり、他の抽象的な事例 (作品、商品、情報) も含めた「本」の意味的特徴として、「有用な項目を数える」という点を指摘している (飯田1999：71-72)。
- 3) さらに、「回」及び「度」との比較を通して、「件」の最も基本となる意味特徴として、対象に対する出来事を重複や繰り返しを含まない抽象的・客観的項目として扱う、という点を指摘している。

それ以上の詳細な記述はみられない(飯田2004:206)⁴⁾。また、「本」は、電話をかける側からの数え方である一方、「件」にはそうした制約はないという指摘もされている⁵⁾。

2.2. 理論的分析—Lakoff (1980), 松本 (1991), Matsumoto (1993)

助数詞は、数える対象を何らかの意味カテゴリーに分類するという機能を持つことから、認知言語学の分野においては、カテゴリー化に関する議論を用いて助数詞の意味や用法の体系的な記述・分析が行われてきた。認知言語学的観点による助数詞の分析では、基本的にプロトタイプカテゴリーの理論を基盤とし、各助数詞の持つ意味カテゴリーは、中心的な意味から、様々な動機付けにもとづいて意味拡張が生じているとされる。以下では、助数詞「件」の先行研究は見られないため、助数詞「本」及び「台」のみの概観となる。

まず、助数詞「本」は、「細長さ」という形状的特徴を中心的な意味とするカテゴリーを形成していると分析される。Lakoff (1987) は、イメージ・スキーマの概念を用いて、「本」の意味カテゴリーが、「本」のイメージ・スキーマを介した放射状カテゴリーを形成していることを示した。「本」のイメージ・スキーマは、「棒、つえ、鉛筆、ろうそく、木、ロープ、髪の毛など」といった細長いものから形成される(Lakoff 1987:104)。そして、「本」のイメージ・スキーマから意味拡張が生じる際の動機付けとして、i) イメージ・スキーマ変換(例:ホームラン)、ii) メトニミー(例:テープ、注射)、iii) メタファー(例:テレビ番組、映画)を挙げている。

「電話」に「本」が適用される際の動機付けは、ii) のメトニミーとiii) のメタファーが関与していると分析している。メトニミーに関して、Lakoff(1980:108)によれば、受話器と電話線が、電話で話す際の主要な機能的役割を果たすことから、それらが我々の電話について慣習的に持っている心的イメージであるとしている。ここで、主要部分が全体のイメージを代表するというメトニミーがはたらき、「電話」の心的イメージが、「本」のイメージ・スキーマと適合することから、電話を数える際に「本」が用いられるとされる。また、メタファーについては、Reddy (1979) の「導管メタファー (CONDUIT metaphor)」がはたらいっていると指摘している。つまり、我々はコミュニケーションというものを、導管を通したやり取りとして比喩的に解釈しているというReddy (1979) の分析を基に、離れた二者間のコミュニケーションである電話の概念においても導管メタファーが成立していると考え、その導管が細長い「本」のイメージ・スキーマと適合することから、電話に「本」が用いられるとされる。

また、Matsumoto (1993) では、プロトタイプ条件によって「本」の意味カテゴリーを規定しており、「電話」は“軌道”を描くものへのメタファーの意味拡張として分析している。Matsumoto (1993) によれば、電話線を通じた会話のやり取りから長い軌道・経路が想定され、

4) 「件」の意味・用法の分類は、飯田(1999, 2004)を参照されたい。

5) 飯田(1999)は、「本」と「件」との違いについて、“誰が数えるか”という点による違いを指摘している。抽象的な項目を数える場合、「本」で数える場合は「主に提供・製造する側の立場に限った特殊な用法である」のに対し、「件」は「どの立場からも抽象項目を数える点で、より客観的に抽象項目を受容する助数詞である」という(飯田1999:212)。

比喩的に細長いものとみなすことができるため「本」が適用されるという。そして、(3)に示すように、「長い電話」に対して「本」の使用は容認されないとして、「本」の使用の動機付けに関与しているのは、あくまで“軌道”であり、電話での会話（通話）は関与しないとしている。

- (3) a. Denwa ga ni-hon kakatte kita.
b. *kare to no hi-hon no nagai denwa.

(Matsumoto 1993, 678)

なお、飯田（1999, 2004）が指摘した電話の「完結」に関する点について、Matsumoto（1993）は、電話が相手にかかった場合に「本」が用いられると述べている。

次に、助数詞「台」について、電話に関する言及はないが、松本（1991）及びMatsumoto（1993）のプロトタイプ理論による分析によれば、「台」の意味の典型条件は、1)〈機械である〉（機械性）、2)〈地面あるいはそれに類した硬い表面上にある〉（表面性）、3)〈物を運ぶ〉（運搬性）、4)〈それ自体が可動性を持つ〉（固定されていない）の4つで、この条件に当てはまるものほど「台」の容認性が高くなるとしている。例えば、自動車とエスカレーターでは、1)から4)の条件を全て満たす自動車の方が、機械性、表面性、運搬性の3つの条件だけを満たすエスカレーターよりも容認度が高いということになる。松本（1991）の分析に従えば、「電話」は運搬性以外の機械性、表面性、可動性の3つの条件が当てはまることから「台」が用いられるということになる。

2.3. 先行研究の問題点と本分析のアプローチ

助数詞「台」「本」「件」は、日本語の主要な助数詞にあたることから、それらの意味や用法について、従来の研究で大部分が記述されている。しかし、「電話」といった個々の事例の意味や用法の違いについては、考察が十分でなく、さらに検討する必要がある。というのも、「本」が用いられる際の電話の意味的特徴として、情報伝達（飯田1999, 2000）、電話回線・受話器（Lakoff 1980）、軌道（Matsumoto 1993）など様々指摘されているが、いずれもその妥当性が十分に示されていない。また、「件」では、飯田（2004）の電話の内容に注目した分析でも、「件」が用いられる基準が明確でない。こうしたことから、「電話」を数える以下の事例に対しても妥当な説明ができない。

- (4) 11日、スタート時間の10時に準備した4本の電話が一斉に鳴り、相談が始まった。
(1a) 再掲
- (5) そんな私に今日は2本の嬉しい電話が。
「大場工芸の営業日報その2」〈<http://bar.dosugoi.net/e349202.html>〉
- (6) 活動は電話相談が中心で、夜8時から翌朝6時までの10時間3本の電話で行っています。
「東京自殺防止センターの活動紹介」
〈http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/whitepaper/w-2007/pdf/pdf_jirei/jirei34.pdf〉

(4)では、電話が鳴る状況で「本」を用いており、相手と話をしなければならないという飯田(1999, 2004)の条件にあてはまらない。また、電話が鳴る場合は電話機としての捉え方が自然と考えられ、松本(1991)による「台」の条件においても、機械性、表面性、可動性の条件が自然に当てはまる文脈といえるが、「台」ではなく「本」が用いられており、これについて説明できない。また、Matsumoto(1993)では、通話内容は「本」の使用の動機付けに関与しないと指摘しているが、(5)のように、電話内容に注目した状況において「本」の使用がみられることから、通話内容の関与について検討する必要があるといえる。そして、(6)では、電話で相談する状況で「本」が用いられており、飯田(2004)の指摘に従えば「件」の使用が可能ということになるが、(6)において「件」の使用は容認されない。

以上から、本稿では、先行研究の問題点として(7)を指摘する。

(7) 数える事物を表す名詞の多義的性質と、数える話者の事物の捉え方の側面が十分に考慮されていない。

従来の分析は、助数詞の意味的制約の一般化が重視されてきたため、各々の助数詞の使い分けについて考察が十分でなく、実際の使用を捉えきれていない。本稿では、数える事物を表す名詞の多義的振る舞いに注目し、その多義的側面から助数詞の使い分けを分析する。分析のアプローチとして、1) 事物の有する意味的特徴は相互排他的なものではなく、2) 助数詞を用いて数える際は、数える話者が数える事物を「主体的に」解釈しているという立場をとる。2) について、本稿では、数える事物がどのような意味的側面を有するかは、数える話者が日常生活においてその事物と関わる中で見出されていくものであると考え、その意味で、数え方には数える話者の主体的な捉え方が反映されているというアプローチをとる。これを踏まえ、日常言語は、認知主体である我々の外部世界との相互作用を通じた解釈の反映であるとする認知言語学の理論的枠組みを採用し、「電話」を数える際の「台」、「本」、「件」の選択の違いを、使用の動機付けの観点から記述・分析する。

3. 認知言語学の理論的枠組み

本節では、分析にあたり、認知言語学における言葉の多義性、メトニミーについての議論について取り上げる。

3.1 言葉の多義性について

認知言語学においては、ほとんどの語は多義的であると考えられる(Taylor 2002)。多義にも様々なレベルがあるが、例えば、“bank(銀行)”の場合、(8)のように[建物][職員][組織]という3つの多義的側面があるといえる(cf. Croft and Crouse 2004)。

- (8) bank = [PREMISES] The bank was blown up.
 [PERSONNEL] It's friendly bank.
 [INSTITUTION] The bank was founded in 1597.

(Croft and Crouse 2004, 116)

これらの意味の側面は、*facet*と呼ばれているが、完全に辞書の意味として自律性の高いものとはいえない。また、例えば、“*a new book*” といったとき、“*book*” が [文章] を指示しているのか、物理的な [本] を指示しているのかわからず、曖昧さ (*ambiguity*) を有しているものともされる。なお、こうした語の多義的な側面は、後述のメトニミーが関与する言語現象とする分析もある。

3.2 メトニミー

メトニミー（換喩；*metonymy*）とは、広くは近接性にもとづいた比喻で、認知言語学では、ある概念領域内のある概念を、同じ領域内にある別の概念で指示することとされる（深田・仲本 2008）。この近接性にもとづいた指示関係にはパターンがあることが指摘されており、例えば、(9) のようなものがある（cf. Lakoff and Johnson 1980, 山梨 1988）。

- (9) a. 〈容器—中身〉 (例：やかんが沸いた。)
 b. 〈付属物—主体〉 (例：メガネを呼ぶ。)
 c. 〈作者—作品〉 (例：太宰を読んだ。)
 d. 〈場所—機関〉 (例：ホワイトハウスは何も言っていない。)
 e. 〈部分—全体〉 (例：ミカンをむく。)
 f. 〈原因—結果〉 (例：赤面する。)

例えば、日常生活で我々は、やかんのお湯が沸いたことを「やかんが沸いた。」と表現し、「やかん」という語を用いて、やかんの中のお湯を指すことがある。この時、やかんとやかんの中のお湯との間で近接関係が成立していることになる。他にも「昨日は鍋を食べた。」と言うように、我々は、容器でその内容物を指示する表現を、日常的に様々用いていることから、(9a) の〈容器—中身〉という近接関係が指摘されている。

こうしたメトニミー現象の認知的基盤としては、参照点構造 (*reference point*) と、それに関与する認知的際立ち (*cognitive salience*) に関する能力が指摘されている (cf. Langacker 1993)。参照点構造とは、概念化主体 (*conceptualizer*) がある目標物 (*target*) に注意をむけたいが、直接その目標物へのアクセスが困難である場合に、より注意を向けやすい参照点にアクセスし、参照点を介して目標物に注意を向けるという心的操作を表したものである。(9a) の「やかんが沸いた。」という表現において、「やかん」でやかんの中のお湯を指示するといった場合、容器であるやかんが参照点、内容物のお湯がターゲットに相当する。

また、参照点となりやすいのは、より認知的際立ちの高いものとなる。例えば、「家のそばに

バイクがある」というとき、ある事物（バイク）を言及するために認知的により容易に特定できる事物（家）を参照しているということになる。このように、人間は一般的に認知的際立ちの高いものに注目しやすいとされ、これは認知的際立ちの能力として、認知言語学では規定される。参照点構造において、参照的が概念化者にとって目標物よりもアクセスしやすいものであるということは、目立つもの、つまり認知的に際立っているものが参照点になりやすいということになる（cf. Langacker 1993）⁶⁾。

4. 分析

本節では、「電話」を数える際に用いられる助数詞「台」、「本」、「件」の使用の違いについて、認知言語学のアプローチから「電話」の多義的側面に注目して分析する。

4.1 「電話」の多義的側面

我々は、外界の事物を、日常生活の使用文脈の中で物理的側面、機能的側面、社会・文化的側面など様々な側面から主体的に捉えている。「電話」についての多義的側面として、一般的な「電話」の使用を観察すると、主に以下の（10a-g）が挙げられる。

- | | | |
|---------|------|----------------------|
| (10) a. | 物体 | （例：電話を持ち上げる、この電話は重い） |
| b. | 機械 | （例：電話が壊れる、電話が鳴る） |
| c. | 設備 | （例：電話を設置する、電話を完備する） |
| d. | サービス | （例：電話を契約する、電話を止める） |
| e. | 情報 | （例：嬉しい電話、電話に腹を立てる） |
| f. | 通信 | （例：電話をする、電話を取る） |
| g. | 出来事 | （例：友人から電話がある） |

まず、物理的側面からみたとき、（10a）の単に物体としての意味的側面があげられる。また、一般的に機械としての機能に注目した叙述も多いことから、（10b）の機械の意味的特徴をもった側面が見出せる。そして、抽象的な側面へ移ると、（10c）設備、（10d）サービスという意味的側面が指摘できる。（10c）について、電話を設置したり、完備するという時は、敷設工事をして、電話回線を通じて離れた二者間で会話ができる設備を整える、またはそうした設備が備わっているということで、我々はそうした設備としての意味でも「電話」という語を用いている。（10d）では、「契約する」や「止める」というのは、電話機を用いた電気通信サービスを申し込んだり、

6) なお、メトニミーの現象が成り立つのは、メトニミーを支える近接性の関係付けにおいて、我々の百科事典的知識や文脈が参照されているためであるという点も重要である。

停止したりすることで、ここから「電話」には「サービス」の意味的側面もあるといえる。さらに、抽象的な意味として(10e)の「情報」が指摘できる。電話を介してやり取りされるのは、広くは情報であり、例えば「嬉しい電話」や「電話に腹を立てる」というとき、「電話」は特に通話の内容、つまり情報を指しているといえる。(10f)の「通信」については、「電話」が「通信」という、相手に電話をする一連の活動を意味的側面に持つということ、例えば「電話をする」「電話を取る」といった他にも、「電話をかける／切る」,「電話がつながる／つながらない」というときも「通信」という意味的側面が焦点化されているといえる。そして、(10g)の「出来事」というのは、電話の通信活動を出来事としてみる意味的側面となる。例にあげた「友人から電話がある」は、電話をかけたことが目的の相手に伝わったときにいうもので、この時“かけ手が電話をかけて、受け手が電話をとる”ところまでをひとつの出来事としてみており、「電話がある」とはその出来事があることを表す。

以上、「電話」が用いられる表現を通して、名詞「電話」の持つ代表的な意味的側面を提示した⁷⁾。

4.2 各助数詞の使用の動機付けについて

本項では、4.1で指摘した「電話」の多義的側面における各助数詞の使用を観察し、使用の動機付けを分析する。「本」の使用の動機付けについては、Lakoff (1980) の指摘する電話回線のメトニミーという考えを、基本的に採用する。Lakoff (1980) では、他に「受話器 (telephone calls)」に対して「本」が用いられるとしているが、受話器は、強いて数えるなら「台」を用いるといえ、受話器からのメトニミーは該当しないと考える。

まず、物理的にみたときの「物体」としての意味的側面では、(11)や(12)のように「台」のみ使用が可能であり、「本」と「件」の使用は容認されない⁸⁾。

(11) 3 {台／*本／*件} の電話を持ち上げた。

(12) 3 {台／*本／*件} の重い電話を部屋に運び込んだ。

次に、「機械」の意味的側面での数え方をみると、(13)のように、電話が「壊れる」では「台」のみ使用可能であるが、(14)や(15)において電話が「鳴る」というときに、「本」が用いられることがある。

(13) 3 {台／*本／*件} の電話が壊れる。

(14) 11日、スタート時間の10時に準備した4本の電話が一斉に鳴り、相談が始まった。

7) なお、これらの多義的側面をみると、いずれもメトニミーの関係が成立しているといえる。

8) 「壊れる」という場合、後述する電話のシステムの意味的側面で捉えると「本」の使用が可能になるが、「電話機」の意味で用いる場合は、「本」は基本的には用いられない。

((1a) 再掲)

- (15) 二本の電話が鳴り続け、電話が取りきれないことがしばしばあったため、とうとう広島支局の方から「電話番号間違ってますか？お客さんから苦情がきてます」というチェックの電話がくる始末。

『米屋宗兵衛 KOMEYA*SOBEI』〈<http://sobei.jp/?mode=f4>〉

「機械」の意味的側面で「電話」が用いられる場合、「台」の使用が自然であるといえる。(14)や(15)で「本」が用いられていることについて、電話が鳴っているというのは電話機が鳴っているということであるが、電話回線が使われている状態であるため、電話回線のメトニミーによって電話機を指していると考えることができる。このように、「物体」及び「機械」の意味的側面で「電話」を数える場合は、どちらも物理的には電話機という具体物を指示しており、具体物としての「電話(機)」に対しては「台」が基本的に用いられるといえる。そして、「本」はメトニミーがはたらいて「電話機」を指示することで用いられているということになる。

次に、「設備」の意味的側面については、(16)や(17)のように「台」と「本」の使用が可能である。(18)や(19)では「台」も使用可能であるが、「件」はいずれの事例でも用いられない。

- (16) 3 {台/本/*件} の電話を設置する。

- (17) この部屋には、3 {台/本/*件} の電話が完備されている。

- (18) ワシントン広場から北へ2ブロックのところのところに位置するホテル。(略) モダンなデザインの客室はシックな空間。全室に大型ライティングデスクや3本の電話があるなどビジネスサポートのための設備も充実している。

「アップルワールド」〈<http://appleworld.com/hotelinfo/hotel/00027215/>〉

- (19) 活動は電話相談が中心で、夜8時から翌朝6時までの10時間3本の電話で行っています。

((6) 再掲)

「設備」というのは、電話機だけではなく電話回線も要素として含んだ抽象的な意味的側面である。従って、「台」を用いる場合は電話機からのメトニミー、「本」を用いる場合は電話回線からのメトニミーによって、「設備」を指示していると考えることができる。(19)についても、「電話」は、具格「で」を伴い、道具として位置付けられていることから、「設備」としての意味的側面が焦点化されて、「本」や「台」が用いられると考えられる。

また、「設備」と同様、「サービス」の意味的側面での「電話」も、「台」と「本」の使用が可能である。

- (20) 引っ越しに伴い、3 {台/本/*件} の電話を契約する。

- (21) 不要になったため、3 {台/本/*件} の電話を止めた。

(20) や (21) においても、電話の通信サービスには電話機や電話回線の使用が中心的に関わることから、電話機からのメトニミーで「サービス」を指示する場合に「台」が、電話回線からのメトニミーで「サービス」を指示する場合に「本」が用いられているといえる。

これまでのところ、各々の「電話」の意味的側面において、「台」と「本」が使用可能で、「件」の使用は容認されなかったが、次にみる「情報」の意味的側面では、「台」の使用は容認されず、「本」と「件」が使用可能であることが観察される。

(22) そんな私に今日は2本の嬉しい電話が。 (5) 再掲

(23) 今日は2 {*台/本/件} の嬉しい電話があった。

(24) 5 {*台/本/件} の電話に腹を立てた。

「情報」の意味的側面において「本」が用いられることについて、先にみたように、「本」の使用は、電話回線のメトニミーを基盤としており、「設備」や「サービス」といった電話回線の使用が想定されるときに、電話回線からのメトニミーがはたらいて、「本」の使用が可能であった。よって、「情報」も、電話回線を通して伝えられるものであるため、同様に電話回線からのメトニミーがはたらき、電話内容を指示していると考えることができる。一方、「台」の使用が容認されないことについて、「台」の基本的な指示対象は電話機という具体物であることから、電話内容という抽象度のより高いものに対しては、メトニミーがはたらかず、「台」は用いることができないと考えられる。なお、「件」が「情報」の意味的側面で用いることができるが、「件」についての考察は、後述する。

続いて、「通信」の意味的側面についてみると、「情報」と同様に「本」と「件」が用いられ、「台」は用いることができない。「本」は、通信活動においても電話回線が必要であるため、「通信」の意味的側面においても電話回線からのメトニミーが生じて「通信」を指しているといえる。

(25) これから10 {*台/本/件} の電話をする。

(26) これまでに10 {*台/本/件} の電話を取った。

最後に、「出来事」の意味的側面においても、「本」と「件」では数えることができ、「台」では数えることはできない。

(27) 今日は、10 {*台/本/件} の電話があった。

(28) これまでに10 {*台/本/件} の電話がきた。

「本」の使用に関しては、出来事としての意味が焦点化された場合では、電話回線は中心的に関与するため、電話回線からのメトニミーがはたらいているといえる。

さて、「件」に関して、飯田 (1999, 2004) が「事象全般を数える」と指摘するように、「件」

は、基本的に出来事（イベント）を数える助数詞であるとみることができる。電話において「イベント」という場合、通常かけ手が電話をかけ、呼び出し音（受け手側ではコール音）が鳴り、受け手が電話を取り、会話をし、電話を切る、という一連の流れと考える。ただし、イベントというのは、通話目的の相手が不在であったり、呼び出し音は鳴っているが受け手が出る前にかけ手が切ったりと、通信活動の途中で終わってもイベントとして成立すれば、「件」が使えると考えられる。(27)の「電話があった」や(28)の「電話がきた」をみても、電話がつながって相手と話をした場合、着信のみの場合、目的の相手が不在で別の者が電話に対応した場合のいずれも指すことが可能である。ここから、「件」は、通信活動において終了した出来事に対して用いられているということが出来る。

そして、(23)から(26)の「情報」や「通信」の意味的側面で「件」が用いられることについては、電話の内容や通信活動が「電話」というイベントを構成する中心的な要素であることから、イベント（電話）とイベントの構成要素（情報、通信）との間でメトニミーが成立しているといえる。つまり、電話のイベントからメトニミーによって、構成要素である「情報」や「通信」に「件」が用いられていると考えることができる。

以上、「電話」の多義的側面とそれに応じて使用される助数詞について、以下の表1にまとめる。

表1 「電話」の多義的側面と助数詞の使用の関係

	物体	機械	設備	サービス	情報	通信	出来事
「台」	○	○	○	○	×	×	×
「本」	×	(○)	○	○	○	○	○
「件」	×	×	×	×	○	○	○

「台」は、基本的には電話機を数える助数詞で、メトニミーを介し、「設備」や「サービス」といった、電話機が中心的に喚起される意味的側面でも用いられることをみた。「本」は、電話回線のメトニミーを動機付けとし、電話回線が関与する「電話」の様々な多義的側面を広く数える助数詞であるといえる。そして、「件」は、イベントを数える助数詞であることから、基本的に「出来事」という意味的側面において「電話」を数え、メトニミーを介して、「情報」や「通信」といった抽象的側面も数えるということが示された。

なお、本稿で指摘する、数える事物の有する意味的側面は相互排他的ではなく、文脈によっては、「電話」が複数の意味的側面から解釈されることもあると考える。(29)の「電話」は、「クレームの電話」という表現から「情報」の意味的側面において、「対応している」という表現から「通信」の意味的側面において捉えられていると考えられ、「本」を用いる際は電話回線からのメトニミーが、「件」を用いる際はイベントからのメトニミーがはたらいているとみることができる。

(29) 5 {*台/本/件} のクレームの電話に対応している。

5. おわりに

本稿では、「電話」を数える助数詞「台」、「本」、「件」の使用の違いについて、「電話」の多義的側面に注目し、分析を行った。本稿の分析から、事物の捉え方、つまり焦点化される意味的側面に応じて様々なメトニミーがはたらいていることが示された。特に、同じ助数詞でも、焦点化される意味的側面が異なると使用の動機付けも異なり、「台」の場合、従来の分析では単に電話機を指示するという指摘のみであったが、多義的側面を詳細にみると、「設備」や「サービス」といった意味的側面では、電話機からのメトニミーによって「電話」を「台」で数えているということが明らかになった。

今後の課題として、本稿で提示した「電話」の多義的側面と各助数詞の使用の関係について、コーパスを用いた統計的分析を行うなどして、実証を図る必要がある。また、使用の動機付けに関しても、認知言語学における認知ドメインやフレームといった概念を援用し、文脈や話者の背景知識との関係から、より掘り下げてみていくことも今後の検討課題としたい。

主要参考文献

- Aikenvald, Alexandra Y. 2000. *Classifiers: A Typology of Noun Categorization Devices*. Oxford: Oxford University Press.
- Croft, William. and Alan Cruse D. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, Alan. 2000. *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.
- Denny, J. Peter. 1979. Semantic analysis of selected Japanese numeral classifiers for units. *Linguistics* 17: 317-335.
- 深田 智・仲本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界』(講座 認知言語学のフロンティア3), 東京: 研究社.
- 濱野寛子・李在鎬. 2007. 「助数詞「本」のカテゴリ化をめぐる一考察—統計的手法を用いて」, 南雅彦(編) 『言語学と日本語教育V』 71-88. 東京: くろしお出版.
- 飯田朝子. 1999. 『日本語主要助数詞の意味と用法』 東京大学大学院 人文社会系研究科 博士論文.
- 飯田朝子. 2004. 『数え方の辞典』 東京: 小学館.
- 井上京子. 1999. 「助数詞は何のためにあるのか」 『言語』 28 (10) : 30-37.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作 他(訳) 『認知意味論』 紀伊国屋書店, 1993).
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point Construction. *Cognitive Linguistics* 4(1): 1-38.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: New York: Mouton de Gruyter.
- Matsumoto, Yo. 1993. Japanese numeral classifiers: a study of semantic categories and lexical organization. *Linguistics* 31: 667-713.
- 松本曜. 1991. 「日本語類別詞の意味構造と体系—原型意味論による分析—」 『言語研究』 (99) : 82-106.
- 李在鎬・濱野寛子. 2006. 「多変量解析に基づく助数詞「本」のカテゴリ化」 『日本認知言語学会論文集』 6:

553-556.

Reddy, Michael J. 1979. The conduit metaphor: A case of frame conflict in our language. In Ortony, A. *Metaphor and Thought*, 284-324. Cambridge: Cambridge University Press.

Taylor, John R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

山梨正明. 1988. 『比喩と理解』東京：東京大学出版会.

山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京：くろしお出版.